Fons Sapientiae

仙台白百合女子大学図書館報 「フォンス サピエンティエ」

No.24
2024.3

Contents

・館長あいさつ
・教員の近刊単・共著の紹介
・推薦図書
・より良い図書館をつくるための懇談会
・編集後記

館長あいさつ

「図書館の思い出」

2023年度図書館長
三浦　主博

皆さん、図書館を利用していますか。私は2020年に仙台白百合女子大学に着任し、この春の卒業生と一緒に4年間過ごしましたが、コロナ禍の中で大学生活を過ごした学生たちは、遠隔授業で大学に登校できなかった時期等もあり、残念ながら、図書館をあまり利用しなかったという話も聞きました。

私は、1989年に大学に入学しましたので、もう30年以上も前の話になりますが、学生時代は携帯電話もインターネットもまだ普及する前でしたので、図書館は貴重な情報源の宝庫でした。今では、インターネットで簡単に情報検索ができ、学術雑誌も大学や学会等のリポジトリで論文も入手できる時代になりましたが、論文一つ探すにしても、図書館にある紙のCitation Indexから必要な論文を探すということをしていました。

私は大学の学部生の時にも図書館はよく利用していたつもりでしたが、大学の図書館には膨大な文献があり、その多くは書庫に所蔵されていて、閉架のため自分で本を探して手に取ることは出来ませんでした。しかし、大学院に進学すると、その閉架の書庫に入ることが許可されましたので、初めて閉架の書庫に足を踏み入れた時のことは鮮明に記憶しています。古書の独特の匂いのする書庫は、開架されている図書館のスペースの倍以上の広さに多くの書物があり、その存在だけで圧倒されました。おそらく一生かけても読み切れないほど膨大な先人の知識がそこにはあり、非常に高揚した気持ちで、目的の文献を見つけた後も、書庫の中でずっと本を探していました。その時の私は、まだ研究者の卵でしたが、研究者を目指して大学院に進学してよかったと強く思いました。

図書館はこのように本を探したり、読んだりするための場所というイメージが強いですが、昔から自習等の学びの場所であったり、最近は、本学の図書館でも場所は限定されますが、食事やゼミを行うことができるラーニングコモンズ的な役割も果たしています。近年出来た公立の図書館（多賀城市や利府町など）でも従来の図書館とは全く違うおしゃれな作りになっているところも増えてきました。

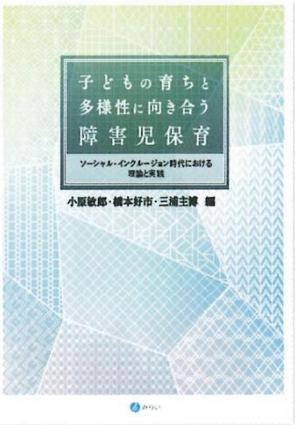
このように図書館は様々な使い方ができるようになっていますので、是非、本学の図書館にも足を運び、皆さんのスタイルにあった活用をしてみて下さい。

教員の近刊単・共著の紹介

『子どもの育ちと多様性に向き合う障害児保育
～ソーシャルインクルージョン時代における理論と実践～』

編者：小原敏郎 橋本好市 三浦主博　ISBN：978-4-86015-619-0　出版社：㈱みらい 2024年3月刊

子ども教育学科　教授　**三浦 主博**



保育士養成課程における「障害児保育」のテキストであり、多様な背景を有する児童の中から児童福祉法の規定に基づく障害児を主とした特別な支援を必要とする児童に焦点を当て、ソーシャルインクルージョンの理念に基づいたインクルーシブ保育の理論と実践について記載した内容となっている。

本書では、インクルーシブ保育（障害児保育）の理念・定義、歴史的変遷、法律・制度、WHO の定義、様々な障害の特性理解、障害児の発達支援、地域社会とのつながり、家庭や関係機関との連携、保育の実際、現状と課題などについて取り上げて概説している。

筆者（三浦）は、編著者として、第5章「障害の特性理解と日常の配慮」として様々な障害について執筆しており、また、本学子ども教育学科の松好先生が共著者として、実践編である、第9章「障害児保育からソーシャルインクルージョンへの広がり」を保育現場での経験を基に執筆している。

推薦図書

『すごい言い換え 700語』　話題の達人倶楽部 編　青春出版社

グローバル・スタディーズ学科　教授　**砂澤 健治**

本書は 2022 年1月に発刊以来、わずか1年足らずの間に第 13 刷の増刷となったベストセラーである。題名をご覧になる限りでは、読み物というより事典の性格を帯びたものではないかと察する方が多いと思う。しかし、実用書というよりはむしろ教養のための読み物であり、日常生活において私たちが毎日使用する日本語の語用論的側面に着目した解説書なのである。同じ内容の日本語であっても、伝え方のいかんによって、相手に誤解を与えるなど、自分の期待する結果を招かずじまいになった経験は誰しもが持ち合わせているはずである。本書では、キツイ言い方を柔らかく、ヨウチな言い方を大人っぽく、フツウの言い方を魅力的な言い方に変えることのできる術を、あらゆる場面に即したかたちで私たちに教示してくれる。「言い換える技術」を身につけるだけで、人間関係はよくなり、仕事はうまく進み、ひいては私たちの人生をより充実した楽しいものに変えてくれると筆者は説いている。これから大人社会を生き抜くためのハンドブックとして、ぜひ多くの皆さんに手に取っていただきたい1冊であります。

『ピュイゼ　子どものための味覚教育　食育入門編』

石井克枝、ジャック・ピュイゼ、坂井信之、田尻泉　著／講談社

健康栄養学科　教授　神田 あづさ

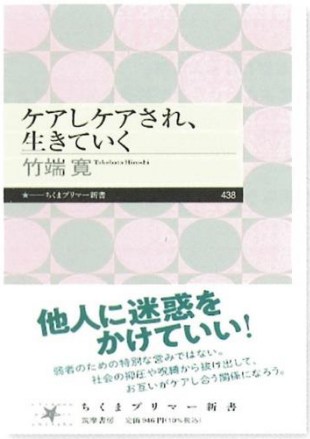
フランスにて味覚教育を提唱したジャック・ピュイゼ氏の思いを伝えるべく書かれたこの本には味覚教育が、食事の過程に「前」「途中」「後」の３つの段階があることが示されております。「前」の段階では、見て、においを嗅いで、触って、その食べものや飲みものが私たちにふさわしいものかを確認します。「途中」の段階では、咀嚼することで、食べものや飲みものがもつ多感覚を刺激するものを解き放ちます。それらは、味覚刺激、嗅覚刺激、身体感覚刺激、触覚刺激、温度刺激として、既知もしくは未知のイメージをつくりながら脳の中にメッセージとして届けられ記憶されます。「後」の段階では、私たちが感じたことを言葉で表現します。言葉にすることで自分が感じたことを人と共有することができるようになり、味わったものの永続性や経験した喜び、その食べ物の生産にかかわってきた人間の痕跡を明かにすることができます。

子どものためにはじめた味覚教育をすすめていくうちに、子どもだけでなく大人も食べものに向き合うようになり、大人自身も変わっていきます。そしてそれは子どもをさらに深く理解していくことにつながっていきます。そのようなこの本を一度、手に取っていただければ幸いです。

『ケアしケアされ、生きていく』

竹端寛　著／ちくまブリマー新書（筑摩書房）　2023/10/6発行

心理福祉学科　講師　吉田 弘美



皆さんは『ケア』という言葉からどのようなイメージをもつでしょうか。近年の社会問題にあるヤングケアラー等から世話や介護をイメージする人も多いかもしれません。辞典で調べると、気づかい、注意、尊重、手入れなど多義的な表現が見られます。著者の竹端氏は、政治学者トロントの考えを引用し、ケアの種類には①関心を向ける、②配慮する、③ケアを提供する、④ケアを受け取る、⑤共に思いやる、があり、最後に示した“共に思いやることとは何か”、を本著のテーマとしています。竹端氏のこれまでを振り返り、大学生の世界、親となり６歳の子どもに視点を当てた世界、48歳の自分の世界、という人生の大きな節目で見えた世界を紹介しています。特に理不尽な労働環境でも「がまんする」、「抑圧的環境に仕方ないと諦める」等、イノベーションが生まれにくい今の時代を「ケアレス」な世界と表現し、これらの閉塞感を越えるにはケア中心の社会に変われるか否かが問われていると明言します。ケアと出会い直すことによって、本学の建学の精神である『慈しむ心』『隣人を愛する心』と通じる出逢いがあるかもしれません。

より良い図書館をつくるための懇談会

魅力ある図書館にするため、学生の自由闊達な意見を伺う場として、今回で５回目となる「より良い図書館をつくる為の懇談会」を開催しました。

今回も各学科の学生にお集まりいただき、沢山の意見を賜りました。

日　時：2023 年 12 月 13 日（水）　12：20 ～ 12：50　　場　所：図書館１階　多目的スペース

参加者：学生７名、教職員７名　計 14 名

●参加者名簿（敬称略）

学　生	教職員
人間発達学科 321218　和田瑛里子（幼児教育コース） 心理福祉学科 522110　大野　柚子（心理コース） 521157　三浦ひな美（福祉コース） 健康栄養学科 623118　菅野　絢心 621135　佐藤あずは GS 学科 722203　大場　杏乃 721222　早坂　莉欧	三浦　主博（図書館長、子ども教育学科教授） 吉田　弘美（図書委員、心理福祉学科講師） 神田あづさ（図書委員、健康栄養学科教授） 砂澤　健治（図書委員、GS 学科教授） 石岡　宏美（事務局次長、図書館事務長） 谷藤　大介（図書館主任） 浅岡　京子（図書館職員）

●学生の意見

（良い点）

意　見
学校全体が明るい、蔵書が多くいろんな種類の事が調べられる。
参考文献が多い。検索コーナーもよく使っている。
ソファーがある。太宰治のあるコーナーや読んだことのある教科書があるコーナーなどがある。
興味を惹かれる新しい本が入ってくる。
勉強の本、資格の本も沢山あるところが良い。
授業で調べたいときに調べられるのが良い。
飲食可能なスペースがあり、図書館内で過ごせるのが良い。
絵本がいろいろな種類があり、有名どころが揃っている。子どもたちも楽しんでいて素敵。
（館内が）暖かいのと、過ごしやすい。静かな空間なので集中したい時など居やすい。

（改善点）

意　見
学内に本を返す BOX を例えば５号館の所などに設置すれば本の返し忘れが無くなるのかなと思う。
回収ボックスが欲しい。
口コミをもっといろんな人が書けたら良い。本を返す時に感想を書いて出せればと思う。
本を探す時に迷ってしまう。心理学などの本を探すのに検索で調べながらで棚の調べ方がわからず時間がかかってしまう。
正面から入ってきた所にあるおすすめの本の説明がもっと欲しい。
心理学の本が点々としているのでまとめてほしい。
図書館の場所が奥にあるので、学科によっては遠く感じてしまうので、おすすめの本などを学科の各階にあれば良いと思う。
図書館にあまり来ないので一般図書などを一から探すのがめんどくさい。

（どうしたら利用者が増えるか）

意　見
イベントをやっているか、ということを知ることのできるパンフを配ったり、ネットや SNS に掲示があるとやっていることがわかるのでは。
スタンプラリーとか。ここに何があるよ、とか、保育の２階の手前で止まってしまうので他の蔵書とか、いろいろあるんだよということが判ると良い。ひょっとしてあめ玉でも（笑）。
UNIPA に図書館の欄があれば見る。学生は UNIPA を見るので。
新しい本が入りましたとかが判ると良い。
本を借りたら小説とかは２週間の期限は短い。人気の本は２週間でも良いが、古い本はもう少し期限が長いともっと何か読もうかなと思う。

編集後記

2021 年度から図書館改革を始めました。

館内は、寄贈本・書架内整理、レイアウト変更、新刊図書入替、分野別コーナー設置、大画面モニターを備えた飲食可能な多目的スペース設置等、利用し易い環境を念頭に整備しました。

館外は、本館周辺のウッドデッキテラス装飾や花壇手入れ、屋外用テーブル・イス等を設置し、落ち着ける環境作りを行いました。

今回で５回目の開催を迎えた「より良い図書館をつくるための懇談会」でも、参加した学生から「利用し易い」という声が多く挙げられ、３年間の改革が功を奏したと思われます。

近々の悩みは、本館の利用者数が伸び悩んでいることです。統計上、継続的な利用者が少ない傾向にあります。次年度以降は、この悩みを解消する更なる取組を行なう必要があると感じております。

学生・教職員の皆さん、是非図書館をご活用ください。

（図書館事務長　石岡 宏美）

障がいのある方へ　障がいを持つ方の図書館利用に関する質問や案内、サポート等に対応します。
希望する場合は図書館スタッフにお申し出下さい。図書館は、バリアフリー設計となっております。

図書館ホームページ　https://sendai-shirayuri.ac.jp/campuslife/sslibrary/

Fons Sapientiae 仙台白百合女子大学図書館報　No24　2024 年 4 月 1 日発行　仙台白百合女子大学 図書・地域貢献研究委員会　〒981-3107 仙台市泉区本田町 6-1
tel 022-374-5090　fax 022-374-4577　e-mail: library@sendai-shirayuri.ac.jp
図書・地域貢献研究委員会：三浦主博　吉田弘美　神田あづさ　砂澤建治　　図書館職員：石岡宏美　谷藤大介　須藤清美　浅岡京子　菅原陽子　浜口美和